

学校と地域をむすぶ

大津市立葛川小・中学校

地域コーディネーターだより

2015. 7. 22

NO. 2

かけはし

防災について学ぶ ～見て 聞いて 歩いてみて～



6月初め、中学1年生が「ふるさと体験学習」で自然の家に2泊3日の宿泊学習に行きました。3日間通して地域の自然や人々とふれ合い、ふるさとの良さを知ろうというめあてで活動が行われました。

1日目は、防災に関わる学習。飯島政彦さんといっ

しょに貫井を出発し、梅の木、町居、坊村を歩きながら地形や災害についての話を聞きました。梅の木の一次避難所になっている「梅の木自治会館」では、林秀一さんのお話を聞きました。



梅の木は災害の多いところ

であるということ、寛文の大地震で梅の木や町居の村が大きな被害にあったことなど、被害の様子を具体的に話していただきました。町居では、左野孝一さんのお話をお宮さんで聞かせて

いただきました。おと年の台風18号ではお宮さんのお社がふっとんだり、土砂で膝上までうまったという話などを聞かせていただき、まだその大きな傷跡が残るお宮さんを目の当たりにして、その恐ろしさを感じました。葛川市民センターでは白井支所長さんのお話を聞きました。



葛川全体の被害や避難の状況を把握する支所の役割や、近年の台風や大雨による葛川の避難の様子を知ることができました。一日案内していただいた飯島さんには、葛川の地形の特色や危険箇所などのお話を聞きました。「自分の命は自分で守る」ということを頭におきながらも、お年寄りの多い

葛川ではお年寄りの避難の手助けをしなければならないということも知りました。



2日目は、伊藤博さんに古地図を使った「寛文の地震」の話をお聞きました。坊村の自治会で保管していた古地図は、今は大津の歴史博物館に保管されています。「寛文の地震」が起きたのは1662年。そしてこの古地図が描かれたのは1800年頃。地震によって土砂が崩れている様子や土砂

によりダム湖ができている様子がはっきりと地図に描かれています。土砂が村を埋めつくしてしまったこと、川の水があふれて村を浸水させたこと、今のような情報網がないので、現地に立ち入らなければ何が起きているのか知るすべがなかったことなどがわかりました。大変な被害のあったこの地震ですが、これを過去のことと片付けてしまうのではなく、何が起きるかわからない現在。常に防災について心がけていかなければならないことを感じました。



3日目には、寿会の皆さん方とグランドゴルフを行うことを計画していましたが、あいにくの大雨となり中止となりました。準備をしておいてくださったのに大変残念でしたが、また別の機会にいっしょに楽しめるといいなあと思いました。

先日の台風11号では、避難勧告、そして避難指示が出て、実際に避難所に避難して一夜を明かすことになりました。大きな被害はなかったものの、やはり自然の恐ろしさ、そして普段からの心得や準備の必要性を強く感じました。

山と川と人々と ～しこぶちさんといかだ師さん～

5年生は、一年間かけて水環境学習を進めています。葛川や久多を流れる川とそのまわりの木々、そして人々の生活が昔からどのように関わってきたのかということを手がかりとして水について考えていきます。昔の人々の暮らしの中で重要な役割を果たしていた「いかだ流し」。

梅の木の林秀一さんからお話を聞きました。いかだを使って久多や葛川の木が安曇川河口の船木まで運ばれていたこと。さらには、奈良の大仏が建立された時には、葛川や久多の木々が川を下って運ばれ使われたということを知り、歴史を身近に感じました。いかだ流しをする人にとって難所と言われる大きな岩や流れの急な淵がたくさんある安曇川。昔の人々はこれらに名前をつけて気をつけるよう声をかけあっていたそうです。伝説に登場する「河童」にまつわる話も聞きました。昔は悪者に思われていた河童が今では守り神に変わっています。梅の木では今でも初生りのきゅうりを2本川に投げて河童にお供えしているそうです。「子どもたちを水難から守ってください」という願いをこめて。

いかだ師をやっておられた久多の小阪源逸さんに、久多のしこぶち神社でお話を聞きました。18歳頃まで実際にいかだに乗って材木を運んでおられた小阪さん。



冬の間には川のふちまで木を運び、雪解けの頃になると木に穴をあけ、ふじのつるで結わえていかだに組む。寒い時期の作業は大変だったようです。水量が少なくいかだが流れない時には、水の中に入りいかだを押し出したり、川幅の広い所では左端に寄っていかなければならない。川にはたくさんの難所があ



り、川合をこえて梅の木までいかだにのった時には、「石だな」とよばれる大きな石が棚になっている所で、腰まで水につかり、浮き上がるいかだに身をまかせ、とてもこわい思いをされたという話も聞きました。材木を運び出すためには大変な苦労や危険な思いをされていたこと、また経験から生まれる技術が必要だったことを知り、その語りを聞かせていただくという貴重な体験をさせていただきました。

それぞれの生き方 そのすばらしさに学ぶ

6年生は「夢プロジェクト」と題して、地域の方々からお話を聞いたり体験をさせていただき学んだことを通して、将来の仕事や生き方について考える学習を進めています。一学期に、5人の方々のお話を聞かせていただきました。貴重なお話や体験をありがとうございました。

比良山荘 伊藤剛治さん

「おもてなし」体験。はじめにお部屋に入らせてもらった時と、一度外に出てから二度目に入らせていただいた時と、何が変わったか？掛け軸や花が飾られた。障子が開けられ庭が見えた。などを発見。とてもうれしい気持ちになった、これが「おもてなし」。また今世界中から注目されている「和食」のエキス。昆布だし、



鰹だし、それらを合わせたものを味見をさせていただきました。ここに入っているのは「旨味」。「和食」のすばらしさを感じました。いつもお客様が喜んでいただけることを考えて仕事をされている伊藤さんの熱い気持ちを感じることができました。

そば職人 奥出一順さん



若い時に身につけた魚やさんの技術。これを生かしてもっと大きな仕事をしてみたい。「そうだ 外国に行こう！」と25歳の時に世界にとびたつた奥出さん。「今しかできないことを経験したい」という強い思い。言葉が通じないという大きな壁を、自分なりに考え努力しながら乗り越えられたこと、身につけた技術は決してなくならないという自信を持って仕事に取り組まれた話をお聞きし、

強い心を感じることができました。「これから先、チャレンジする時がたくさんやってくるはず。とにかくやってみると必ずとびらは開かれ、知らない世界が現れる。チャレンジしてみよう」というお言葉に背中を後押しされました。

駐在所 塩山泰行さん

なぜ警察になったのか？という質問に即、返ってきた答えは「人のために仕事がしたかった」。この一言に感動しました。常に目標を持ちそれに向かってがんばる気持ちは、高校の時に国体3位の成績をおさめた重量挙げ。優勝したかったという



くやしきはまた次の目標へ。警察の仕事をしよと決めてからは、必要不可欠の体力づくりを心がけられます。厳しい訓練にやめなくなる時もあったそうですが、それを乗り越えてこられました。身につけられている物やパトカーの設備を見せてもらいながら、常に危険と背中合わせのお仕事でありながらも一つでも事故や事件を防いでいきたいという思いにすばらしさを感じました。

写真家 宮田清彦さん

ふだん当たり前のように雑誌や本を見ている私たち。その中には文や絵や写真が載っています。しかし、その1枚の写真を載せるためには多大な時間と労力が費やされているのです。同じ場所で同じ物を撮った写真を見せてもらいました。少しずつ何かは違っています。風景を撮るには、一日そこでカメラを構えて撮り続けることもあるそうです。たくさん撮った写真の中から選ばれるのはたった1枚だけ。その写真が記事や文章を生かしていくのだと思います。いいものを生み出すためのねばり強さやプロ意識を感じることができました。



陶芸家 川瀬竹秋さん

川瀬さんの工房で体験させていただきながらお話を聞きました。まずは土をこねるところを見せていただきました。軽々と手で押してこねておられ、「これならできそう」とやらせてもらおうと、何とすごい力が必要で思ったようにまるまってくれません。『土こね3年』と言われるぐらいうまくするには年数がかかるよ」と聞き、技術を身につけるためには大変な年月や努力が必要であることを感じまし



た。ろくろを使って指先でうすくのばして自由自在に形を作っていく姿に思わず「すご〜い」と声が出てしまいました。これまでに作ってこられたたくさんの作品。それらは、その時々々の川瀬さんの思いがこめられた世界にたった一つの焼き物なのだと思います。